

南十字星と貿易風

二・三日前、母船式延縄漁業で赤道直下にて操業していた時に毎晩のように見えていた南十字星を思い出した。

昨夜次男が来たので、その話をしたら「日本では何処から見えるか」と質問された。私は不覚にも「沖縄と、もしかすると鹿児島県でも見えるかも知れない」と答えた。

「東京が一番よく見える」と言う。私はなるほどと感心した。東京都には日本最南端、小笠原村沖の鳥島がある。台湾の南端よりも南だ、その北にある硫黄島は太平洋戦争激戦の地であり、現在は自衛隊が駐屯しているそうだ。インターネットで検索すると、二ヶ月に一度の定期便があるようだ。南十字星や赤道まで行く航海のエピソードを思い出し、若き時代を偲んだ。

私達が乗っていた漁船が日本を離れ赤道周辺に行くには、乗組員の多い宮古か、母港の釜石を出港するが、神奈川県三崎港に寄港して南下する事もある。大海原を百屯足らずの漁船が、単独で漁場に集まらなければならぬ。

本州の山々が霞んで見える沖合を南下、犬吠岬灯台が見える沖合を過ぎ、野島崎沖あたりから、伊豆諸島の島々が霞んで見えて来る。大島、利島、新島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島の七島が時間を於いて遠望できる。青ヶ島を過ぎると、大海の真ん中に、マツチ箱が海面からニョッキリ高く姿を現すように見える、無人島の不気味な姿が見えてくる。大シケの時はこの須美寿島（スミス島）の側で避難するそうだ。

鳥島の沖を南下すると硫黄島だが、昼夜を分かつたず航海を続けるから、夜、通過した島は眺められない。島に灯台があれば、閃光が、チラリ、チラリと目を射つ。

鳥島沖を過ぎる頃より貿易風が吹き始める。東寄りの風が一年中吹いている。グアム。サイパン沖を過ぎる頃より強まり、船は木の葉のように、波に翻弄される。毎度の事だが貿易風帯を乗り越えなければ、波の穏やかな、赤道周辺の漁場には行けない、真横からの強い風だ。

当直の操舵手二人、機関員一人以外は、寢床の中で過ごす。私通信

士はいくら揺れても、内地や母船との定時連絡、気象情報、新聞電報の受信、僚船との交信もしなければならぬが、殆ど床の中だ。全員の仕事は、船で（かしき）と呼ばれる、新前の若者が用意する。

晴れれば南十字星も見えてくる、南十字星も、北斗七星と同じように極点の周りを一日で一周する。緯度が高いと地平線の下に隠れて見えぬ。赤道が近くなるといつでも肉眼で眺めることが出来る。

マリアナ諸島のサイパン島、観光地のグアム島添いに南下、カロリン諸島の、トラック島とパラオ島の間にある、無人島や珊瑚礁の間を縫う如く、近くになつた漁場に向かう。貿易風も収まり南十字星も、角度を高くして見えるようになる。

漁船には、風呂がない。海水に普通の石鹸は役に立たない。海水石鹸なるものが渡され使用する。航海中も赤道直下になると、毎日のように、スコールがやってくる、バケツをヒツクリ返した様だと表現するが、凄い。スコールがくると、殆どの者は、タオルと普通の石鹸を持ち、スップンポンになり甲板に飛び出す。降る時間は長くて十分程だ、大急ぎで天然のシャワーを浴びる。

椰子の実が群れをなして浮き、流れている事がある。船を停止拾い上げ皆で分配、飾り物など工作する。私も教えられ、壁飾りの花立てを作った。蔵王の家で、今も五十年前と変わりなく居間で私達を待っている。

貿易風帯の中を寢床で、好きなナツメク

「 吹けよ そよ風 恋風 夜風 」

と口ずさみながら、大海の真っ直中を、ひたすらべた凧の漁場に向け南下した若き時代を思い出し、感傷に耽る

